

1、鷗外の「小説らしさ」と「理性」

森鷗外「歴史其儘と歴史離れ」（『心の花』一九一六年一月）は、次のようにはじまる。「わたくしの近頃書いた、歴史上の人物を取り扱った作品は、小説だとか、小説でないとか云つて、友人間にも議論がある。しかし所謂 *normative* な美学を奉じて、小説はかうなくてはならぬと云ふ学者の少くなつた時代には、此判断はなかくむづかしい」。

ここにいう「*normative* な美学」とは、一八世紀ドイツ・ロマン派の興隆が生んだ“*Wichenchaft Literatur*”（知文学ないし理文学）に対する“*Schöne Literatur*”（感情表現を主体とする「美文学」）と考えてよいだろう。それは芳賀矢一『国文学史十講』（一九九九）が日本の文芸から漢詩文を、また和歌や物語を構成する知的要素、あるいは歴史物語や軍記物語の歴史解釈の知的要素を排除して、それらを「美文学」の範疇に収める「国文学史」なるものの構想を示すものになったものだった。

その「美文学」の観念は、夏目漱石が『文学論』（一九〇七）で提示した彼がイギリスで学んできた「*F+ff*」（*Focus*＝対象的事物）とそれに付随する（*feeling*＝感情ないし情緒）の公式にも影を落としていたかもしれない。漱石が意識していたかどうかは定かでないが、認識論ではエルンスト・マツハ『感覚の分析』（*Die Analyse der Empfindungen*, 1886）で認識を直接経験（五官の感覚）の函数 $f(x)$ で示しうるとした経験主義（*empiricism*）の流れにも沿うものだった。

鷗外のいう小説の定義が定まっていた時代の歴史小説は、歴史伝承を叙事詩のようにストーリーを展開させる小説を指していたと考えてよいだろう。だが、スコットランドの詩人、ウォルター・スコットがサクソン人とノルマン人の抗争の歴史に架空の人物を活躍させる『アイヴァンホー』（*Ivanhoe*, 1820）、ないしはフランスの作家プロスペル・メリメがスペインの民間伝承に取材した『カルメン』（*Carmen*, 1845）のように、歴史的過去を舞台にとって、男性を振り回す情熱的なジプシー女が登場するなど、歴史小説に様変わりが生じてきたことを念頭においていたかもしれない。

だが、ドイツにおいては、一九世紀後半、世の現実のあるがままを暴露する「自然主義」（*Naturalismus*）が台頭してロマン主義が崩されたのち、さらに二〇世紀への転換期にはヨハネス・ハウプトマンが戯曲『沈鐘』（*Die versunkene Glocke*, 1896）で森の精の活躍する多神教の神秘的世界の開示に向かったように、象徴主義が台頭していた。その

ことは、鷗外自身、ヨハネス・フォルケルトの論考「Ästhetische Zeitfragen」(1895)を『審美新説』(一九〇〇)として翻訳刊行しており、日本でも知られていた。そのフォルケルトの立場は、象徴主義を、あるがままの「自然主義」以降の「後自然主義」、いわば「自然」の本質を抽出して開陳するものと位置付けるもので、日本で自然主義を鼓吹した人びとを象徴主義に接近させ、混乱に陥れていた。ただ一人、自然主義とはジャン・ジャック・ルソーの『告白録』(Les Confessions, 1782)の刊行)に示された精神という信念を曲げなかった島崎藤村を除いて¹⁾。そして、鷗外による西欧小説の翻訳紹介も、彼自身がいうように、好奇心の赴くまま、無方針を方針としていたから、とりわけ一九〇〇年代後半には、地の文も口語体で多様な作風を繰り広げた。

鷗外「歴史其儘と歴史離れ」は、そのあとにつづけて彼が総合雑誌『太陽』(一九一四年九月)に寄せた「栗山大膳」は、体調優れず、あらずじだけに終始し、小説にはなっていないことをいい、編集者に「雑纂」欄に掲載するよう言ったが、小説欄に掲載され、ルビがまちまちになっていることにふれている。鷗外は編集者が手分けしてルビを振ったと推測しているが、これは原稿が博文館の印刷所に、小説として機械的にルビ付き活字で組む行程に流されたもので、誰も校正しなかったものと想われる。

一七世紀前期に起こった福岡藩の御家騒動、いわゆる黒田騒動について、鷗外の見解は、栗山大膳が黒田家への忠義を貫くため、二代目藩主、黒田忠之の乱行を謀反の疑いありと己れの命を賭して訴え出たことにより、黒田家は取り潰しを免れたというものだった。それは戦国武士の主君への忠義心が、主家への忠義に転換すべきものと説かれるようになった時節を捉えたものだったが、粗筋のみ記して小説らしい肉付けを行えなかったことに、鷗外自身、恨みを残していたのである。では、鷗外の考える「小説らしさ」とはどのようなことか。

鷗外はそこで、自身の信念を「史料を調べて見て、其中に窺はれる『自然』を尊重する念」と述べている。この「自然」は「自ずから然り」を意味する漢語、朱子学にいう「格物窮理」＝事物のもつ理(ことわり)すなわち「本性」に相当し、ドイツ語「natur」、英語「nature」の訳語にもなっていた。これは明治期知識人の常識の範囲である。それに重ねて鷗外が「わたくしの作品は概して dionysisch でなくつて、apollinisch なのだ。わたくしはまだ作品を dionysisch にしようとして努力したことはない。わたくしが多少努力したことがあるとすれば、それは只観照的ならしめようとする努力のみである」という。フリードリヒ・ニーチェ歿後、日本でも彼が称揚したディオニソス神話に根差した

熱狂と酩酊、反理性的傾向を悦ぶ傾向は広がりはじめていた。それに対して自分は一貫してアポローン神、太陽の光、合理的秩序の側に身を置いてきたと述べている。

一八九一(明治二四)年から翌年にかけて、坪内逍遙の唱える写真主義が表層的なものに過ぎず、底のないものと看破したとき、鷗外が想定していた世界の底とは、エドゥアルト・フォン・ハルトマンが『無意識の哲学』(*Philosophie des Unbewussten*, 1869)にいう「無意識者」だった。それはフリードリッヒ・ヘーゲルのいう絶対理性から論理性を奪い、アルトゥル・ショーペンハウアーのいう宇宙の「盲目的意志」とその表象に一元化した普遍性をもつ実体、無意識者を想定したもので、ドイツ観念論哲学から絶対的超越神から与えられた自然や歴史の合目的性を除いてしまう大胆な仮説だったが、鷗外がドイツ留学中に、これと出会ったことは「妄想」(一九一〇中に明らかである。また、ここではハルトマン以降、「無意識」のことは言外において、美学に意識の変容(modification)が一般化としているという考えを覗かせていた。

ドイツ医学を学ぶ傍ら、儒学系医学も学び、東洋哲学にも馴染んでいた鷗外にとっては、世界の本体にあたる「自ら然るもの」があつて当然と考えられていたと想つてよい。一九世紀後半には、物理学でエネルギー還元主義も電子論も盛んになっていたし、真・善・美の一致を唱える新カント派も頭をもたげていた。物心両面にわたってさまざまな世界の本体論が渦巻いていた。医学では病原菌を病の本体とする志向が主流だった。鷗外は諸分野で、どれかの仮説を足場にするしかないことを承知していたはずだ。

帰国の翌年、一八八九年、鷗外か国文系の新体詩を目指す人々と共同し、新声社を結成し、西欧の詩情を代表するシェイクスピア、バイロン、ゲーテ、ハイネ、レーナウら大家の詩を選んで古典和文の手法を活かした翻訳詩集『於母影』を編んだことはよく知られる。美学上では、さらにハルトマンの『美の哲学』(*Philosophie de Schönen*, 1887)へ歩を進めて、美的表象の成り立ちを自然美と歴史美、芸術美との関係や、外界から享受した感情と外界へ投影した感情、実際の感情と仮構された感情との四肢構造をなす心理の仕組などを大村西崖との共篇『審美綱領』上下巻(一八九九)に編み、心理学的な美学の基礎を固めていた。先のフォルケルトの『審美新説』も、その過程で訳述したものだった。

そして鷗外は、芸術の新しい動きに敏感に次つぎに反応した。二〇世紀への転換期には、上田敏と象徴詩運動の勃興に呼応して、ベルギー・フランス語圏の詩人、モーリス・メーテルランクの詩やエッセイ、劇作の翻訳の機運をつくり、民謡(Folklore)の収集の機運をつくり、またデンマークの童話作家、ハンス・クリスチャン・アンデルセンがイタ

リアを舞台にした自伝的小説『即興詩人』(Improvisatoren, 1835)の翻訳(一九〇二)をものしたかと思えば、イタリアのフリッポ・トンマーゾ・マリネッティが発表した、レーシング・カーの騒音と速度に象徴される新しい機関を賛美し、古典的伝統美の革命を訴える未来派宣言全一カ条が一九〇九年二月二〇日、フランスの『フィガロ』紙に掲載されると、その三〇日後に翻訳紹介している。

明治期に学芸の新しい土台を築くための戦闘的啓蒙主義を貫くには、一種の剛直さも必要だった。かつてドイツで情を交わした「エリス」にあたる女性がはるばる訪ねてきても、普請中の日本で自身の地位を保つには追い返すしかなかったし、己れが血を吐こうがそれを隠し通すしかないことを家族にも認めさせるだけ自身の社会的役割についての責任感が森林太郎という人に根を張っていたことは誰しも認めざるをえないだろう。当初は抑圧する側に立った文芸上の「言文一致」のものには従ったし、一時期は米飯の栄養の高さを証拠立てて陸軍の医学に味方しても、脚気には麦飯が予防になることも認めていった態度に、理性の側につく信念を貫いたことも認められよう。

2、「興津弥五右衛門の遺書」から歴史ものへ

だが、鷗外がいわゆる歴史ものに着手したのは、いわば偶然からだった。乃木希典とは若き日とともにドイツ留学して遊んだ仲だった。日露戦争の戦場でも顔を合せていた。その乃木希典が一九一二年七月二五日、明治天皇歿後、その大喪(九月二二日)の済んだ晩、遺書を遺して自刃、その妻も道を同じくした。

その事件と遺書に翌朝の新聞で接した鷗外は「半信半疑」と日記に記していた。そして鷗外は『中央公論』の乃木希典追悼号(一九二一年一〇月)に追悼文を寄せることなく、「興津弥五右衛門の遺書」を寄稿した。鷗外の歴史小説や史伝と呼ばれる作品群は、それに端を発している。つまり明治が終わってから着手されたのだった。

乃木希典は薩摩が蜂起した西南戦争に出陣した折、激しい戦闘に連隊旗を奪われ、責任を感じて自刃しようとしたが許されず、周囲に諫められて止められたた経験を書き残していた。明治国家が成立して以来、初めての大きな内乱である。国家の威信を賭けた初めての戦闘に連隊旗を失うことがどのような意味をもつか、国家の威信というものへの思いの丈が問われたといえよう。乃木は明治新国家の初めての植民地である台湾経営にもあたった。謹厳実直な立場で臨み、このころから乃木の評価は毀誉褒貶半ばした。

日露戦争では、旅順攻囲戦でロシア軍の築いたトーチカを落とすのに将兵の多大な犠牲

を強いる作戦を敢行し、ついにロシアに白旗を上げさせた。乃木は、そののちの戦闘で息子二人を失ったが、その後、奉天会戦での戦功も目覚ましかった。凱旋將軍と詠われたが、明治天皇の前で復命書を読み上げたのち、自刃を申し出たものの明治天皇はこれを許さず、死にたければ自分の歿後にしろ、と命じたという。乃木を学習院の院長に就任させたのも明治天皇だったといわれる。その乃木が明治天皇を追って切腹したことを新聞は「殉死」と報道し、白樺派など若い世代は、それを古い封建道徳のように唾棄したし、そのように説いた新聞の記事もあった。

殉死は、日本では古代から禁じられていた。だが、戦国武士の間に、主君と生死を共にする気風が育ち、江戸初期には徳川幕府が土台を築くために改易に追いやられた大名の追い腹を切る武士も出た。房総に割拠し、館山城主だった安房里見家もその一つで、一六一四年、家康に改易に追いやられ、七人の剣士が追い腹を切った。のち、これが江戸後期、曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』のネタになった。

だが、その風習は、平和時の主君の「家」の繁栄に尽すことこそ武士のつとめと改まっていた。それゆえ、明治近代に殉死など、あつてはならないものだった。が、明治近代とともに時代を歩んだ人々のなかにも、内田露庵や西田幾多郎、夏目漱石ら乃木の自刃には、明治という時代に殉じた者という厳粛な感慨を抱いた人びとがいたのも実際だった。森鷗外もその翌日の報道にとまどいは抱いたものの、そのような感慨を抱いた一人だった。ただ、普請中の日本の軍隊の医療と文芸ために邁進してきた己れの歩みとのちがいも痛く感じたにちがいない。

鷗外は、明治天皇の死によってようやく殉死を許された乃木の境涯を想い、世間のいうように殉死の一種にはちがいはなくとも、主君と生死を共にした戦国武士のそれとは程遠い。その異形の殉死を何とか言葉にしたい、しなくてはならないと思った。

そして九月一八日午後、乃木の葬礼ののち、「奥津弥五右衛門の遺書」一編を『中央公論』の編集者に手渡した。鷗外は乃木とはドイツ留学中に一緒に遊んだ仲だった。日露戦争でも顔を合せている。かねて追悼文を依頼され、引き受けていただろう。実際、鷗外が追悼文を書かずに奇妙な短編小説を追悼号に寄せたのは異常というべきことではないか。

乃木の殉死を称賛するわけにはいかないという思いもよぎったことだろう。かといって咎めるわけにもいかなない複雑な思いをことばに残すための、それは苦肉の策だったのではないか。鷗外が一九一〇年、社会主義思想に同調する者を一網打尽にした大逆事件に暗い想いを抱いていたことは、その年から翌年にかけて当代の空気を描いた小品によく刻まれ

ている。そのような機運に流されてはならないという思いもはたらいたと想う。かねて鷗外「興津弥五右衛門の遺書」を、乃木の殉死を弔うレクイエムであるかのように論じる流れが主だったのだが、それに異を唱える人も出てきている。鷗外が「興津弥五右衛門の遺書」を著した理由を推理してみたい²⁰。

異形の殉死には前例があった。一六二四(寛永元)年、まだ戦国時代の殉死の風が残っていたころのこと。肥後細川家の基礎を築いたとされる細川忠興(ただおき)(三斎)は、ヴェトナムからの交易船が着いた知らせに茶事に使う珍しいものを手に入れてくるように命じた。二人の臣下を長崎に遣わした。二人の武士は最高級の香木・伽羅を伊達藩の使者と争い、あまりに値段が吊り上がったため、本木を求めることを主張した興津弥五右衛門は、末木でもよいのではという異見のもう一人の武士と刀を抜きあう争いになり、誤って彼を殺めてしまった。興津は伽羅の本木を手に入れ、細川藩に持ち帰ったのち、臣下を殺めた罪を負い、切腹を申し出た。だが、三斎は、弥五右衛門が忠義を貫いたことを誉め、切腹を許すことなく、二人の武士の家の仲をとりもった。弥五右衛門はその恩義に応えて三斎によく仕くえた。三斎の歿後には京都・船岡山に草庵を営んでいたが、その十三回忌にあたって、身の周辺を整えて切腹し、果てた。

鷗外は、その興津弥五右衛門の「遺書」なるものを『翁草』から「擬書」としてつくってみせた。『翁草』は、京都町奉行所の与力を勤めた神沢杜口(かんざわとこう)が退職後、戦国から江戸時代を通して將軍から武家、公家、僧侶や諸相の人々の生涯にまつわる巷説を拾い、コメントした考証随筆前後篇二百篇からなる。その前編(一七七二〔明和九〕序)〔卷之六〕中「細川家の香木」に拠った。ただし、『翁草』は江戸時代を通して異版が多い。一八八二年に東京大学文学部に設置された古典講習科和文科(三年制)を卒業した池辺義象が『翁草』の異版を集めて校訂したものも刊行されていた(一九〇五〔明治三八〕)。

鷗外は、切腹を許されなかった者が、主君の歿後、かなり経ってからその初志を貫いた話を乃木希典も知っていたかと思っただけではないか。だが、それは当て推量にすぎない。そんな追悼文を書くわけにはいかず、「擬書」を仕立ててみせた。「擬書」ゆえ、小説欄に掲載されたのだった。ただし、末尾で一九世紀前半に編まれた幕府の公式史書『御実記』(通称『徳川実記』)により、日付を補ったことわり、時代考証に未詳箇所があることも言い添えていた。

そのうち鷗外は史実を整理しなおし、「興津弥五右衛門の遺書」を二倍ほどに改稿し、

半年の間に、殉死が許されないまま、一族が追い腹を遂げた事件を題材にした「阿部一族」と、さらにもう一篇、短篇「佐橋甚五郎」を加え、一九一三年六月、三作をまとめた歴史小説集『意地』を靱山（もみやま）書店から出版した。

「佐橋甚五郎」は家康の命に従い、恩愛を受けた人物を殺害し、家康の恩を受けながら家康のもとから去った佐橋甚五郎が、のち朝鮮通信使に交じって家康のもとに参上する場から筆を起し、彼がかつて家康のもとから去ったのは、家康が恩愛を受けた者を殺害した彼を「むごいことをする奴」と評したゆえとした。これも『御実記』などに見える話で、殉死とはかわらず、主君の命に従うことがディレンマを生むことへとテーマは横滑りしている。いずれも主君の命を受けたものが意地を張りとおした話で、その通し方が三作と見もちがっている。鷗外自身は「軼事（いつじ）軼篇」、世に隠れた出来事を掘り起こしたものと題するつもりだったが、版元の意向で端的に『意地』となったという。

江戸後期、敵討が復活していたことを書いた「護侍韻（ごじいん）の原の敵（かたき）討ち」（『ホトトギス』一九一三年一〇月）では、江戸屋敷に入った強盗に金庫番をしていた父親を殺された娘が一年半苦勞して犯人を追い詰め、仇討ちを果たす顛末を書くが、仇討ちから離脱する弟の姿も入れ、太田南畝が仇討ちをほめそやす気風を嫌っていたことまでふれている。これは、世相の変化に関心を移しているように想えるが、「堺事件」（『新小説』一九一四年二月）、「大塩平八郎」（『三田文学』一九一四年一月）では、決して「軼事」とはいえない世を騒がせた事件を扱った。二つとも関係者の挙動を時系列に書き並べて、合間に成り行きがわかるように説明が入る。史実の記録に讚や論のコメントを付すのは『史記』以来の伝統だが、鷗外は事件の顛末を細かく再現しながら、成り行きを貫く「理」を説いた。

幕末、慶応四年二月、土佐藩士がフランス帝国海軍水兵を殺傷した攘夷事件の事後処理を中心にした「堺事件」は、藩士たちが処罰されることを認めず、二〇名の切腹を認めさせ、その順を籤引きで決めたこと、一人一人、淡々と実行に臨みつつ、すさまじい死に方を示し、フランス人将校たちが殺傷された人数一名に達したところで引き開けたため、あとは死なずに済んだことを一人一人の切腹の場面に立ち会い、報告してゆく。当代の武士道の在り方をよく示している。噂話が乱れ散ることのないように気配りしている。

「大塩平八郎」の場合も、一党の人々のその日の行動を一人一人、時系列に並べて、最後に事件を総括し、平八郎の生涯をまとめてある。大塩平八郎は社会政策を立てる立場がなく、暴動を起こしたのは「未だ醒覚せざる社会主義」と見、その「良知の哲学」（陽明

学)からは「頼もしい社会政策も生れず、恐ろしい社会主義も出なかった」とまとめている。鷗外は大逆事件については、学問・芸術の自由が侵される方向に向かう懸念を隠さなかったが、彼はあくまで軍医であり、体制派知識人の一人であった。その目から見れば、たしかに事件は圧政への反逆、社会の片隅を乱した暴動という域を出るものではなく、世直しの側面を示したわけではなかった。

3、「歴史離れ」の機微

ここまで書いて、ようやく「歴史其儘と歴史離れ」(『心の花』一九一五年同月)。に戻ることができる。そこには、説教節で知られた「山椒太夫」(『中央公論』一九一五年一月)では「歴史其儘」に縛られず、想像を楽しんだと書きながら、また歴史離れがしたりないと閉じている。「歴史離れ」は、歴史を離れて、大きな虚構を構えることではない。題材を歴史的事実にとりながら、それを虚構に仕立てることである。鷗外は、「歴史其儘と歴史離れ」で『太陽』に寄せた「栗山大膳」が粗筋だけに終わったと記していたが、『太陽』には、それ以前、「安井夫人」(一九一四年四月)を寄せていた。

幕松の幕府学問所に重きをなし、多くの儒者を育てた安井息軒の妻に焦点を当てた作である。「お佐代さんは夫に仕えて労苦を辞せなかった。そしてその報酬には何物をも要求しなかった。ただに服飾の粗に甘んじたばかりではない。立派な第宅(ていたく)におりたいとも言わず、結構な調度を使いたいとも言わず、うまい物を食べたがりも、面白い物を見たがりもしなかった」。そういう安井夫人に焦点を当てて、どこに面白味があるのか。

安井息軒は日向国飴肥(おび)藩の学者の息子に生まれたが、幼いとき疱瘡を患い、片目となり、顔に傷が残った。その男との縁談をお佐代さんの妹は、にべもなく断ったが、美人で聞こえたお佐代さんは自分が嫁ぐと申し出たというストーリーが伝わっていた。「安井夫人」の一場面を引く。仲平は息軒の字(あざな)。

お佐代さんは形(なり)ふりに構わず働いている。それでも「岡の小町」と言われた昔の俳(おもかげ)はどこやらにある。このころ黒木孫右衛門といふものが仲平に逢いに来た。もと飴肥外浦の漁師であつたが、物産学にくわしいため、わざわざ召し出されて徒士(かち)になつた男である。お佐代さんが茶を酌(く)んで出しておいて、勝手へ下がつたのを見て狡猾(こうかい)なやうな、滑稽なやうな顔をして、孫右衛門が仲平に尋ねた。

「先生。只今のはご新造さまでござりますか」

「さやう。妻で」恬然(てんぜん)として仲平は答へた。

「はあ。ご新造さまは学問をなさりましたか」

「いいや。学問といふほどのことはしておりませぬ」

「してみますと、ご新造さまの方が先生の学問以上のご見識でござりますな」

「なぜ」

「でもあれほどの美人でおいでになって、先生の夫人におなりなされたところを見ますと」

仲平は覚えぬ失笑した。そして孫右衛門の無遠慮なやうな世辞を面白がつて、得意の碁棋(ぎるぎ)の相手をさせて帰した。

二人がまだ江戸で貸家住まいしていたころの出来事だが、この漁師あがりの如才ない男の追従とそれに息軒が気をよくした場面に鷗外の「歴史離れ」がかかっている。この短編に「新しき女」が新聞を騒がせていた時代背景をいう向きがあるが、江戸時代の女性が主体性を発揮しなかつたわけではない。お佐代さんは、縁談に振り回されるより、学問一筋の男に仕える落ち着いた暮らしを選んだひとだった。

そして「歴史其儘と歴史離れ」を書いた年、鷗外は『中央公論』に「津下四郎左衛門」

(四月)と「魚玄機」(七月)、「最後の一句」(十月)を寄せている。「津下四郎左衛

門」は、幕末に「尊皇攘夷」運動に走り、明治二年に維新政府参与、横井小楠(通称、平四郎)を暗殺し、翌年一〇月、死刑になった津下四郎左衛門の息子からの聞き書きの体裁をとる。「尊皇攘夷」という初めから誰も実現しないと考えていたはずのスローガンに着しつづけた父親を愚かと断罪し、逆賊の汚名を着てもしかたがないとは思うが、逆賊の息子と見られることに悩み、大学も辞めざるをえなかつた苦境を漏らしていると、その級友だった息子から聞いた鷗外が、その悩みを紹介したのだった。そののち、「初稿は媒なかたち

となつて、わたくしに数多あまたの人を識らしめた」と付記して、津下四郎左衛門とともに行動しようとした同郷の者たちや明治一九年から二〇年にかけて政府方にも津下四郎左衛門の特赦を願う動きがあつたことなどを『還魂録』(名家傑作集第十二篇、春陽堂、一九一七年八月)に再録するなどした。明治は終わっても、また巷間に事件の記憶は漂い、周辺の事情は集まるということを鷗外は実感した。むろん、今日いう情報には、バイアスもかかれ、虚偽も混じよう。「歴史其儘」に就くには、それらを選び分ける知を要するが、

そこに妙味も覚える。この経験が、鷗外を史伝に向かわせたともいえよう。

「魚玄機」（『中央公論』一九一五年四月）の場合は、唐代の美人で知られた女詩人が道士として道館で暮らしていたとき、下女を殺して獄に下った事件は、日本にも伝えられていた。その粉本を漁り、時代が離れた異国の風俗に彼女の詩をちりばめつつ、数奇な性向を辿った人生を辿ってみせるところに妙味を感じたのだろう。

一九世紀の西欧各地の文芸には、各地の多神教の伝承に取材した物語詩や歴史的事件に虚構の人物が活躍するような新形式の歴史小説が波うつていた。鷗外は、とくに後半の後期ロマン派の中短編小説を次から次へと翻訳紹介し、『諸国物語』（国民文庫刊行会、一九一五年一月、非売品^{II}予約出版）にまとめていた。趣向もさまざまに凝らしたのである。

「最後の一句」は、一種の裁判小説である。難船の後始末に濡れ衣を着せられた大坂の廻船業主の、「いち」という幼い娘が祖母の愚痴から父親が陥れられたことを知り、「父親を死罪にするなら自分たち兄弟姉妹が代わりに仕置きを受ける」と奉行所に訴え出たという話。大人の計略と見た役人は、兄弟姉妹をお白洲で調べにかけるが、揃って父親の身代わりになると証言し、いちが最後に「お上の事には間違はございますまいから」と付け足したという。自己犠牲、献身という観念は、当時まだなかったが、その言葉が奉行所の胸に響いたのだろう、父親には恩赦が下されたと結末を告げて、小説は終わる。

翌一九一六年、鷗外は『中央公論』一月号に「高瀬舟」を寄せる。これは『翁草』後篇（一七九一「寛政三」）卷之百十七にある「流人の話」がもとで、流人を舟に載せて高瀬川を下る役人が、その役柄、まるで運命に見放されたような出来事に遭遇するうち、罪を負って生きるしかないという諦念を身に着けた心境を聞かされ、ほだされる類の話で、優れた人情漸を想わせる。「山椒太夫」とも趣向を変え、鷗外は江戸時代の巷説類を各種の小説に仕立てていることがわかる。

4、「寒山拾得」のこと

その同じ月、鷗外が『新小説』（一九一六年一月）に寄せた「寒山拾得」は、唐代の州知事にあたる高位の役人が頭痛に悩んでいたとき、国清寺という禅寺から来たという乞食坊主に水を吹きかけられ、気を散らされ、たちまち頭痛を直してもらったとき、その寺に養われている寒山と拾得という二人の修行僧が、実は人々に知恵を授ける文殊菩薩と慈悲の實踐を示す普賢菩薩が姿を変えた者だという話を聞いて、国清寺を尋ねていったという禅宗ではよく知られた伝説を紹介している。寒山は岩屋に棲んで詩を能くした僧で巻物を手

にし、拾得は掃除や鎌焚きが仕事で、帚を手にもつ姿で画に描かれる。

「寒山拾得」は漢文調などといわれるが、中国の伝説ゆえ漢語は多くとも、日本の小説雑誌の読者向けに適当にアレンジした口語常体である。鷗外も当初は小説の「言文一致」季付録）では係り結びを用いた雅文体の工夫を見せたりしていたが、知識人が妻と母親の角逐にわずらわされて休日を通ぐす身辺雑記風の短編「半日」（一九〇九年三月『昴』）を手はじめに口語常体で書きはじめていた。その頃から西欧の小説の翻訳も文末は「だ」「である」調になる。漢文（中国古典語）も西欧近代の各国語も構文の基本はS・V・O・O（ないしC）だから、明治初期から西欧文献の翻訳は漢文書き下ろし体でなされ、動詞の時制にも関係代名詞の処理にも工夫が重ねられてきていた。鷗外は、それ以外にも、場面の転換や客観的な叙述を話者自身の視点に転換して書くところなどで、読者が惑わないように長いダッシを入れることを、多様な一九世紀後期の西欧小説の翻訳から身につけていた。それらを集めた『諸国物語』（国民文庫、一九一五）を覗いてみればよくわかるだろう。

この「寒山拾得」でも途中に長いダッシに挟んで、嘴を入れている。修養の季節に禅宗やキリスト教など信仰の教えを説くエッセイが飛び交っていることを背景に、道にまったく無頓着な人、道を求める人の二つの中間に、道をありがたむばかりの人という項を設け、盲目的な信仰の無意味さを説いている。その一節を挟んで「寒山拾得」のストーリーは次のように運ぶ。

その州知事にあたる役人は、国清寺を訪れ、頭痛を直してくれた禅坊主は、この寺で飯炊きなどしていたが、夜中に虎の背に乗って詩を吟じていたことを聞いて驚き、その禅僧に拾われた寒山と拾得との関係はいかなるものか、と疑問に思いながら、寒山と拾得について尋ねると、みすばらしい身なりの二人が火にあたっていた。州知事は、その二人にもつたいぶった挨拶をしたとたん、二人は、この寺で仕えてきた禅僧が二人の正体を告げたと、と哄笑して姿をくらましてしまった、というのが話の落ちである。

文殊も普賢も、世のどこに隠れているかわからない、というところが、この寓話の胆である。万人が仏性を宿しているという大乘仏教の教えを芯にして、禅林では常住坐臥がこれ修行、度外れた奇行や狂体の詩が飛び交うことなどを一つの奇譚にまとめたものといっよい。世の中の地位ばかり気にかけている役人風情には通じようもない風狂や飄逸の世界が禅林にあることを集約した寓話である。それを紹介した鷗外は、だが「傍観者」よろし

く、禅林に潜んだミステリーにはふれることなく、わけもわからず、教えを貴ぶことの無意味さを説いてみせた。およそ的外れな教訓を引き出したといわざるをえない。

ところが、この話には、「附」（ついたり）として、「寒山拾得縁起」がつけてある。これを書いた楽屋話である。子供たちが「寒山拾得」が文殊と普賢というのがわからないというので、この話をしたが、まだわからない。そこで、最近、救世主や霊能者を名乗る話題の宮崎虎之介の話をもちだしたが、なお、わからない。知的青年たちに修養が盛んに説かれ、国家神道から零れ落ちる人々が大本や天理教に救いを求めてゆく時代だが、知的な家庭に育った子供たちに信仰や信心なるものを説くのは難儀なことだったことだけ知れる。最後には「そしてとうとうこう言った。「実はパパも文殊なのだが、まだ誰も拝みに来ないのだよ」とある。

落語の落ちでもつけたつもりだったのだろうか。鷗外が帝室博物館総長兼図書頭に任じられていたときのことで、世の知恵袋と崇められてもおかしくない地位だから、あながち気取り過ぎにはならないだろうが、「誰も拝みにこない」は、道を究めようと先へ行く者を無暗に信奉するのは無意味と教訓を垂れたところで、誰からも崇拜を受けたこともないくせに、と文壇からチャチャが入るのを先回りして防いだ感がある。鷗外晩年の心境がうかがえて興味深いという評があるが、これはセルフ・パロディーにもなっていない。霊能者など持ちだしても何ほど通じなかった子供たちはもちろん、読者にもピンとこなかったのではないか。いや、寒山も拾得も世の中から身を隠してこそ寒山であり拾得なので、鷗外が、自分が文殊などと名乗ったとたん、偽物と白状したに等しいのだ。

鷗外が励んだ医学は儒学すなわち漢学系とドイツ系で、仏教には明るくなかった。修養の時代に入る前から、京都では鈴木大拙や西田幾多郎が臨済禅に励み、江戸っ子の夏目漱石も鎌倉の円覚寺の山門前をウロウロした。鷗外晩年の「諦念」を禅宗とかかわらせて説く向きがあり、津和野の生家の菩提寺は禅寺で、また小倉時代に曹洞宗の僧侶と親交があったことも知られてはいる。だが、何事も成り行き任せの人は座ったことはなかった。この頃の漢詩を引いておく。

次白水孤峰韻

去来何必問因縁。去来 何ぞ必ずしも 因縁を問はん

入地昇天任自然。地に入り 天に昇るは 自然に任す

至竟效顰非我事。至竟顰（ひそみ）に效（なら）うは 我が事に非らず

不憑基督不參禪。 基督によらず 禪に参ぜず

5、鷗外「史伝」とは？

森鷗外は、江戸時代、弘前藩の医師で考証学者でもあった渋江抽斎のほとんど世に知られていない人の生涯を辿る伝記を書くに至った動機や己れの読書の傾きまでを含めて読み物ふうの説き起こし、その末裔たちが維新を迎えるまでを追う『渋江抽斎』を一九一五年一月から五月まで『東京日日』『大阪毎日』に連載開始した。やはり漢語は多いが口語体である。両紙は別資本だが系列会社。これは「大塩平八郎」で叛乱を起こしたその日の配下の一人一人の動きを時系列で追った手法を拡大したものと見てよいだろう。そして渋江抽斎の医学上の師であった伊澤蘭軒とその家族、一門の弟子たちの群像を追う『伊澤蘭軒』を一九一六年八月―一七年九月、やはり『東京日日』『大阪毎日』に連載。

これらは「史伝」と呼ばれているが、「史伝」は中国の正史の紀伝体の「史」と「伝」をまとめて、当時、漠然と歴史読み物一般をいう語として用いられ、鷗外が好んで用いたものではない。

『伊澤蘭軒』連載開始の「其三」にいう。「材料の扱方に於て、素人歴史家たるわたくしは我儘勝手な道を行くことゝする。路に迷つても好い。もし進退維（これ谷（きは）まつたら、わたくしはそこに筆を棄てよう。所謂行当（いきあたり）ばつたりである。これを無態度の態度と謂ふ。／無態度の態度は、傍（かたはら）より看れば其道が險悪でもあり危殆（きたい）でもあらう。しかし素人歴史家は樂天家である」と。

自身の書き方を嘯いているかのようだが、もとより計画したものではない。興の趣くままというのとちがう。乃木希典の自刃の報に接して生じた疑問から江戸時代の巷説に分け入り、史実を整え直して「興津弥五右衛門の遺書」を改訂し、一点一点周辺に広げて手探りしつつ、一人の生涯に閉じることなく、世に知られていない事績を解きほぐす意図のもとに統合した結果が『渋江抽斎』に展開した。

藩儒も医師も一人で成れるものではない。渋江抽斎が人痘法を習ったのも蘭軒からだつた。『伊澤蘭軒』は、江戸末期の医者一族一門の動きに見渡し（パースペクティブ）を広げたところに鷗外の工夫があった。

『渋江抽斎』から『伊澤蘭軒』に進むうちに、渋江抽斎の師にあたるにあたる池田京水が幕府お抱えの医官の家を継がずに独立した経緯など跡継ぎ問題も解決する。そうかと思えば、たとえば八百屋お七の袱紗がひょっこり出てきたりもする。『渋江抽斎』から『伊

澤蘭軒』に記事の中身が跨ったり、周辺の雑事にふりまわされたり、『伊澤蘭軒』の展開は散漫になりがちである。明治・大正期の新聞連載小説は、帝紀購読者確保する媒体として有効なものと目されていた。連載小説としては、波乱万丈のフィクションではないし、当時の風俗を面白くよませるものでもないから、評判はあまりよくなかったと伝えられるが、それは文芸批評家のものではろう³。新聞連載小説は、毎日毎日、読み続けさせるストーリー展開こそが命と思つて読むからだろう。

評者たちは『渋江抽斎』から『伊澤蘭軒』に種痘の話がメインストーリーとして続いていたことさえ気が付いていなかったのではないか。『伊澤蘭軒』を高く評価する側も、それにはふれようとしなない。が、その終わり近く、杉田玄白の娘・八百と鳥取藩医・田中淳昌の子で蘭軒に入り婿した棠軒^{たうけん}は、榎本武揚の五稜郭攻略に参加したのち、江戸に帰つても日録を絶やさなかった。『伊澤蘭軒』「その三百五十二」に、庚午十一月一〇日の条に「種痘は遂に伊沢氏に入つた」の一文が見える。棠軒^{たうけん}が三男に牛痘を施した記録である。一八七〇年のことであつた。

罹患した患者の膿胞などを摂取させて免疫をつくる人痘法は、アジアでは古くから行われており、中国経由で一八世紀中頃には長崎に伝えられていた。漢方医はこれを用いた予防法を工夫していたが、西欧で開発した牛痘法が一八世紀中ごろに長崎に入り、蘭方医がこれを定着させ、天皇等は維新後にはほぼ根絶されてゆく。ただし、今日では、幕末にかけて種痘をめぐつて漢方医と蘭方医のあいだで角逐があつたことが明らかにされているが、鷗外は、それにはふれていない⁴。

『伊澤蘭軒』の新聞連載のあいだに、渋江抽斎と芝居見物を通して付き合ひの深かつた寿阿弥(神田の菓子屋、真志屋五郎作)の手紙が売り立てに出された。この手紙から鷗外は、水戸の威公(頼房)または義公(光圀)の代に、商家の娘が奉公にあがる内に落胤ができて、これらに真志屋を名乗らせ、庇護下においたという推測を立て、『伊澤蘭軒』の終了後、文政頃の町人の手紙文(候文)を残すために仕立てた短篇続編「寿阿弥の手紙」(『大阪毎日』『東京日日』一九一六年後五月〜六月)が付された。こうして鷗外にとつても次から次に意外な展開が待っていて、いわば寄り道が付されたことになる。このようにして江戸の巷間には知られていたが、忘れられてしまった意外な穴が埋められてゆくことは、読者の関心を呼ぶことでもあつただろう。鷗外史伝の連載は、いわば『大毎』『東日』の名物となつていたとわたしは思う。

したがって『渋江抽斎』『伊澤蘭軒』は、ジャンルとしては、江戸後期に様ざまな分野

に広がった考証随筆を一族・一門の歴史に展開した評伝の一種といつてよいだろう。それに派生した巷説の随筆もつく。そしてさらに『伊澤蘭軒』で備後福山藩の漢学者、北条霞亭について一応はまとめた事績を細かく調べる関心か昂じて『北条霞亭』に及び、だが、帝室博物館総長などの職に就いて思うに任せず、「霞亭生涯の末一年」（一九二〇〜二二）まで断続的に連載雑誌を移して執筆をつづけた。鷗外か若き日に抱いた隠逸伝中の人物の像は遠く消え去り、狷介な人柄という評判とは裏腹な俗情も炙り出している。それを、どう評価すべきだろう。

6、石川淳『森鷗外』

石川淳『森鷗外』（三笠書房、一九四一）は、鷗外の『渋江抽斎』『伊澤蘭軒』『北条霞亭』といわゆる史伝三部作の「大文章」を称賛し、先の「行き当たりばったり」から、「歴史其儘」ならぬ「精神のエネルギー」の進むままにまかせる姿勢を導き、それを「精神の運動」と称している。「大文章」とは、とくに藩儒の用いる硬い漢語の語勢がその当時の用法のままを伝えてやまないことをいう。江戸中後期の漢学者の日録やも町人の手紙などを掘り出し、その筆の動きまでを読みこなすことは、大正期には一部の考証家の手にゆだねられるようになっていた。幼少の砌から昌平黌の助官だった祖父に漢文をただ着こまれた石川淳ならではの賞玩だが、北条霞亭の自己顕示欲を抉り出すに至ったことを指摘し、そしてそれを鷗外が「自身の血を流した」と評している。

これには北条霞亭が最期に委縮腎を抱えていたことに鷗外が言及し、鷗外自身も腎臓病の症状を呈してたということが重ねられ、鷗外自身が自分の内なる自己顕示欲をえぐったという意味で、それを「小市民的」と評している。それにはもう一つ、北条霞亭が病のなかで書いた手紙のなかから、伊勢山田の町が保護されて驕奢の巷になっていることを貧乏人が羨むのを貶したところを鷗外が引用して、「今の社会主義共産主義を駁するのと同じ」と書き、それを「愚者の政」と称しているところと重ねて、鷗外の「小市民」ぶりを炙り出すという二重の芸がはたらいている。

「小市民」はフランス語「プチ・ブルジョワ」の翻訳語である。石川淳『森鷗外』は、そろそろ、対米英戦争がはじまろうかという時期に書き下ろして刊行された著作だが、森鷗外に潜んでいた自分の栄達を望む根性をむき出しにしていることを暴露している。むろん、返す刀で一頃、盛んだった左翼の思想を子供じみたものと切って見せてはいない。石川淳はマルクス主義も一応は齧ってはいた。が、アナキストの姿勢で対峙していた

から、戦時中からヨシフ・スターリンの強権的姿勢を唾棄するのに臆するところもなかった人だった。むしろ、戦争が終わって見たら、ソ連も連合軍に加わっていたので、検閲に備えてスターリン批判の舌鋒を緩めなくてはならなかった。

それはともかく、石川淳が「北條霞亭」に至って鷗外が自分の自己顕示欲という小市民性を自己暴露したというのは、書くことの運動は、己れを意図しないところに連れてゆくことがあるという証左として述べているのであって、『北條霞亭』は失敗作などと論じているのではない⁵。また鷗外が、当代の官僚機構のなかで、医学と文芸を截然と分け、一時は出世を諦めながらも、最後はトップの地位にまで登ったキャリアについては、松本清張『両像・森鷗外』（文藝春秋、一九九四、歿後の刊行）がよくトレースしていることを言い添えておく。

鷗外の『渋江抽斎』『伊澤蘭軒』『北條霞亭』は、世に「史伝」と呼ばれるが、「史伝」は中国の正史の紀伝体の「史」と「伝」をまとめて、当時、漠然と歴史読み物一般という語として『太陽』の目次などに見かけはするが、鷗外が好んで用いたものではない。鷗外の「史伝」は、ジャンルとしては、江戸後期に様ざまな分野に広がった考証随筆を一族・一門の周辺の日録や書簡を発掘しながら、その歴史に展開したものと違ってよいのではないか。端的に言えば長編の考証随筆である。

石川淳は、精神のエネルギーの発動するままに展開するのが芸術の本質と考えていたので、いわゆる史伝を「小説」と称してはばからないが、鷗外が「歴史其儘と歴史離れ」を著した一九一六年に、胸中にあった「観照的ならしめようとする」努力は「歴史離れ」の方にかかっており、「歴史其儘」は歴史探索の考証随筆の展開であり、『伊澤蘭軒』あたりでは、ほぼ全面的に登場人物たちの事績を追うことの方に関心を移していたといっている。むしろ、事績の一つ一つは説話をなし、それが続くので説話を鎖状に編んだ物語の一種、その意味では長編小説ともいえる。この種のものをノンフィクション・ノヴェルの日本型と考えるなら、江戸の奇譚やそれをめぐる考証随筆の類に、その発生を見ることができらるだろう。だが、それらはいくまでも説話集として編まれていた。それらを一連のものとして編む行為は鷗外の「歴史其儘」によってなされたということになるだろうか。

(二〇二六・二・一六)

¹ 鈴木貞美『入門日本近現代文芸史』（平凡社新書、二〇一三）を参照。

² 鈴木貞美『日露戦争―日本文化の転換点』（平凡社新書、二〇二二）〔第六章〕を参照。

³ 向井敏『文章読本』（文藝春秋、一九八八／文春文庫、九九一）

⁴ 香西豊子『種痘というへ衛生』近世日本における予防接種の歴史』（東京大学出版会、二〇一九）など参照。なお、木内昇『惣十郎浮世始末』（中央公論新社、二〇二四）は、幕末の江戸における種痘をめぐる蘭法医と漢方医の角逐をめぐる捕物帳。

⁵ 向井敏『文章読本』（文藝春秋、一九八八／文春文庫、一九九一）中に、そのような読み方が示されているが、全くの誤読というべきである。